

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月30日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21330179

研究課題名（和文） ポスト近代社会における＜新しい能力＞概念とその形成・評価に関する研究

研究課題名（英文） Studies of the concept of "new abilities" and their assessment in the post modern society

研究代表者

松下 佳代（MATSUSHITA KAYO）

京都大学・高等教育研究開発推進センター・教授

研究者番号：30222300

研究成果の概要（和文）：ポスト近代社会において、初等教育から高等教育にいたるまで、さまざまな能力が、経済先進諸国で共通して教育目標に掲げられ、評価されるようになってきた。これらの＜新しい能力＞に共通する特徴を見出した上で、それを論じるための枠組みを構築した。さらに、それがもたらしつつあるカリキュラム・授業・評価などへの影響を、諸外国（アメリカ・北欧・オーストリア）での調査を通じて明らかにするとともに、算数・数学教育および理学療法教育でのパフォーマンス評価の開発研究を通してその形成・評価のあり方を提案した。

研究成果の概要（英文）：In the post modern society, a variety of abilities have been adopted as educational goals and elaborately assessed from elementary to higher education in economically developed countries. We found shared characteristics in these "new abilities" and formed a framework for classifying them. In addition, based on examining their impact on curriculum, teaching and assessment through comparative investigation in the U.S., North Europe (Sweden and Finland) and Austria, we proposed our own method of performance assessments in math education at elementary/secondary level and physical therapy education at higher level.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2010年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2011年度	2,400,000	720,000	3,120,000
年度			
年度			
総計	6,000,000	1,800,000	7,800,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学、教育学

キーワード：教育方法

## 1. 研究開始当初の背景

1980年代以降、とくに90年代に入ってから、多くの経済先進国で共通して、さまざまな能力が教育言説の中に見られるようにな

ってきた。それらの能力は、generic、key、coreなどの修飾語と skills、competencies、qualificationsなどの名詞を組み合わせた語（例えば、generic skills、key

competencies など)、あるいは、graduate attributes、employability などと呼ばれている。わが国でも、初等・中等教育から高等教育・職業教育、労働政策にいたるまで、「生きる力」「PISA 型学力」「就職基礎能力」「社会人基礎力」「学士力」「エンプロイヤビリティ」などの能力が、90 年代半ば頃から、教育目標に掲げられるようになってきた。

同時に、OECD の PISA 調査やその影響を受けて始まった「全国学力・学習状況調査」などに典型的にみられるように、これらの能力は評価の対象にもなり、教育政策・研究・実践に大きな影響を与えてきた。

なぜ、こうした能力が 90 年代以降、教育段階の違いを問わず、世界各国で教育の課題とされるようになったのだろうか。

これらの能力は、ポスト近代社会、知識基盤社会、生涯学習社会といわれる現代社会に必要な能力とみられることから、本研究ではそれを＜新しい能力＞と総称した上で、その概念や、形成・評価のあり方を検討することにした。

## 2. 研究の目的

(1) とくに 1990 年代以降に提唱されるようになった PISA リテラシー、DeSeCo キー・コンピテンシー、学士力、社会人基礎力などに共通する特徴を見出して＜新しい能力＞として概念化し、理論的・歴史的に分析する。

(2) ＜新しい能力＞が、経済先進諸国（日本、アメリカ、北欧、ドイツ語圏）において具体的にどのような教育政策・教育方法として提案され、大学を含む学校教育の実践現場にいかなる影響を及ぼしているのかを実証的に明らかにする。

(3) ポスト近代社会における学校教育においてどのような能力が必要であるのかを検討し、その形成および評価・測定のある方を、教育政策や教育実践のレベルをも視野に入れながら提案する。とくにパフォーマンス評価に焦点をあて、算数・数学教育や理学療法教育において開発・実践を行う。

## 3. 研究の方法

本研究では、①教育方法を主軸としつつ多様な学問的知見を取り入れること、②初等・中等教育から高等教育までを分析対象とすること、③日本と欧米の動向を重ね合わせること、を特色としつつ、理論研究・比較研究・実践研究を組み合わせた研究を実施した。

### (1) 理論研究

共同で進めてきた先行研究の検討結果をふまえながら、比較研究や実践研究を通じて

新たに得た資料やデータをもとに、＜新しい能力＞概念やその形成・評価に関する理論を深めた（それらの理論は、再び比較研究・実践研究にも還元された）。とりわけ、＜新しい能力＞概念の系譜と社会的・文化的・歴史的背景の検討、＜新しい能力＞という包括的概念に共通する特徴の抽出と個々の概念間の差異の分析に重きを置いた。

### (2) 比較研究

2009 年度はオーストリア、2010 年度は北欧（スウェーデン、フィンランド）、2011 年度はアメリカ合衆国と、毎年、地域を変えながら訪問調査を実施し、＜新しい能力＞の内容、その教育へのインパクトについて、社会的・文化的・歴史的背景による差異と共通性を明らかにすることを試みた。

各年度の訪問先は以下の通りである。

#### ①2009 年度

- ・ウィーン市内の小学校・中学校訪問—授業参観と教員へのインタビュー
- ・ウィーン大学—K. H. グルーバー教授へのインタビュー
- ・BIFIE Zentrum Wien（教育スタンダード作成センター）訪問—関係者へのインタビュー
- ・情報交換と文献資料収集

#### ②2010 年度

- ・ヨーテボリ大学（F. マルトンほか）—Deep Learning および Learning Study についての資料収集
- ・ヨーテボリ市 Polhem gymnasiet—職業専門プログラムの観察とインタビュー
- ・ストックホルム大学—PRIM グループの開発した全国学力テスト（パフォーマンス評価）に関する資料収集
- ・ユヴァスキュラ大学附属小学校—授業見学とインタビュー
- ・ユヴァスキュラ大学教育研究所—PISA2009 結果に関する資料収集

#### ③2011 年度

- ・エッセンシャル・スクール連盟 2011 年度秋フォーラム—資料収集
- ・ボストン市ミッション・ヒル・スクール—授業見学とインタビュー

### (3) 実践研究

理論研究や比較研究と関連づけながら、＜新しい能力＞の形成・評価についての提案を行った。とくに、コンピテンスの形成・発現の文脈要因に自覚的な評価法としてパフォーマンス評価に着目し、その開発研究を実施した。具体的には、初等・中等教育レベルにおいて算数・数学教育のパフォーマンス評価、高等教育レベルにおいて理学療法教育分野でのパフォーマンス評価である OSCE-R（OSCE リフレクション法）の開発・実施を進めた。

\*OSCE-R とは、OSCE（客観的臨床能力試験）

とグループ・リフレクションを組み合わせた評価方法 兼 学習ツールである。

#### 4. 研究成果

##### (1) 研究の主な成果

##### ①<新しい能力>概念の共通性と差異の明確化

<新しい能力>とはポスト近代社会（後期近代社会）において学校教育だけでなく生涯を通じて求められるようになった能力のことである。それは、(a) 認知的な能力（基本的な認知能力から高次の認知能力まで）だけでなく、対人関係能力や人格特性・態度なども含む人間の全体的な能力をさす、(b) 教育目標および評価対象として位置づけられる、という特徴をもっている。

ただし、能力の垂直軸（深さ）でみると、要素主義的アプローチと統合的アプローチを、能力の水平軸（広さ）でみると、脱文脈的アプローチと文脈的アプローチに分類することができ、統合的・文脈的アプローチに立つ<新しい能力>は「ポスト近代型学力」批判に耐えうるものになっているといえる。<新しい能力>を一括して批判・放擲するのではなく、そこに含まれる多様な概念を腑分けし再構築するスタンスが求められる。

##### ②PISA 調査や全国学力・学習状況調査の教育へのインパクトの明確化

比較研究を通じて、オーストリアでは、PISA ショック後、スタンダード導入による大幅な教育改革が進められていること、スウェーデンでは、日本とは目的や性格の異なるナショナル・テストが実施されていること、フィンランドでは、PISA の高成績の一方で、モチベーションの低さ（とくに男子）が問題になっていること、アメリカでは、アカウントビリティの要請のもとでのテスト主義に対抗する形でパフォーマンス評価（あるいは真正の評価）が実施・展開されていることなどが明らかになった。

一方、日本の教育に対して PISA は、「政策転換への直接的影響」（ゆとり教育から学力向上への転換）と「構造変化への間接的影響」（PISA リテラシー的な能力の目標化と PDCA 等の目標-評価システムの浸透）を及ぼしてきている。

##### ③パフォーマンス評価の開発と活用

初等・中等教育レベルでは、算数・数学教育でパフォーマンス評価の開発と活用を行った。また、算数教育でのパフォーマンス評価を事例に、パフォーマンス評価で用いられるルーブリック（評価基準）が質の数値化のツールになりやすいという問題を指摘し、学びの質を垂直的に把握するためのツール（ルーブリック）と水平的に把握するためのツール（解法のタイプなど）の両方が必要である

ことを実証的に明らかにした。

高等教育レベルでは、藍野大学における理学療法教育分野での OSCE リフレクション法（OSCE-R）を具体例として、シミュレーション場面でのパフォーマンス評価が、グループ・リフレクションと組みあわせられることによって臨床能力の育成に効果的な学習ツールになりうることを示した。また、単に技能や態度をみるだけのパフォーマンス課題では不十分であるという結果を受けて、思考しながら実践することを促すパフォーマンス課題への改訂も進めた。

##### (2) 研究成果報告とインパクト

##### ①中間報告書

<新しい能力>概念の生み出された背景や系譜、諸概念間の共通性と差異、ならびに各国（日本、オーストリア、スウェーデン、アメリカ、フィンランド）の学校教育に与えてきた影響について整理し、その成果を単行本として刊行した（松下佳代編著『<新しい能力>は教育を変えるか—学力・リテラシー・コンピテンシー—』ミネルヴァ書房、2010年9月）。なお、フィンランドの章は、オウル大学のペンティ・ハッカライネン教授によって執筆された。内容は以下の通りである。

まえがき（松下佳代）

序章 〈新しい能力〉概念と教育—その背景と系譜—（松下佳代）

第 I 部 〈新しい能力〉—その理論と背景—

1. 能力を語ること—その歴史的、現代的形態—（樋口太郎）

2. リテラシー概念の展開—機能的リテラシーと批判的リテラシー—（樋口とみ子）

3. 〈新しい能力〉と教養—高等教育の質保証の中で—（杉原真晃）

4. 学力論議の現在—ポスト近代社会における学力の論じ方—（石井英真）

第 II 部 新しい教育のオルタナティブを探る

5. 日本の場合—PISA の受け止め方に見る学校の能力観の多様性—（遠藤貴広）

6. ドイツ・オーストリアの場合—PISA 以後の学力向上政策—（伊藤実歩子）

7. スウェーデンの場合—全国学力テストにおけるパフォーマンス・アセスメント—（本所 恵）

8. アメリカの場合—カリキュラム設計における「工学的アプローチ」の再構築—（石井英真）

9. フィンランドの教育制度における教師の能力形成への挑戦（ペンティ・ハッカライネン）

解説（松下佳代）

この本は版を重ね、学会誌や新聞、雑誌な

どにも書評や紹介が掲載された。

- ・『教育方法学研究』第36巻(2011年3月)
- ・『関西教育学会紀要』第11号(2011年6月)
- ・『教育学研究』第78巻第3号(2011年9月)
- ・『教育目標・評価学会紀要』第21号(2011年11月)
- ・『教育学術新聞』第2424号(2010年12月1日)

今後、『指導と評価』、『カリキュラム研究』でも紹介される予定である。

## ②最終報告書

中間報告書以降の論考・学会発表(Ⅰ)、各年度の海外調査報告(Ⅱ)、アメリカの学校改革、真正の評価実践で知られるデボラ・マイヤー氏、ニコラス・マイヤー氏を迎えての講演・研究会の記録(Ⅲ)を所収した最終報告書を2012年3月に刊行した(<http://hdl.handle.net/2433/155948>)。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計28件)

- ① 石井英真、現代社会が求める「真正の学力」とは—「教科する」授業とパフォーマンス評価—、初等教育資料、査読無、第885号、2012、94-97
- ② 伊藤実歩子、PISAがもたらしたオーストリアの教育の変容—ドイツ語圏の「テスト文化」に着目して—、甲南女子大学研究紀要 人間科学編、査読無、第48号、2012、21-31
- ③ 遠藤貴広、NCLB法制定後の米国エッセンシャル・スクール連盟におけるパフォーマンス評価を組み込んだアカウントビリティ・システムの展開—ニューヨーク・パフォーマンス・スタンダード・コンソーシアムを事例に—、福井大学教育地域科学部紀要、査読無、2巻、2012、161-169
- ④ 杉原真晃、教養教育科目における社会人基礎力の育成—学問活動と「移行」を前提とした学習を通して—、山形大学高等教育研究年報、査読無、第6号、2012、15-23
- ⑤ 松下佳代、PISAで教育の何が変わったか—日本の場合—、教育テスト研究センター CRET シンポジウム報告書、査読無、2011、1-10
- ⑥ 松下佳代、〈新しい能力〉による教育の変容—DeSeCoキー・コンピテンシーとPISAリテラシーの検討—、日本労働研究雑誌、査読無、第614号、2011、39-49
- ⑦ 松下佳代、PISAの能力観・評価観と日本

的受容の過程、教育、査読無、第785号、2011、4-12

- ⑧ 石井英真、算数・数学科における「本質的な問い」とパフォーマンス課題、指導と評価、査読無、第683号、2011、56-59
- ⑨ 遠藤貴広、学校教育における評価論の動向、日本社会教育学会紀要、査読無、47巻、2011、104-105
- ⑩ 遠藤貴広、PISAの受け止め方に見る学校の能力観の多様性—DeSeCoのコンピテンシ概念を手がかりに—、教師教育研究(福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻)、査読無、4巻、2011、287-295
- ⑪ 樋口とみ子、W. S. グレイのリテラシー論における機能について—「熟達した読み」の指標化に焦点をあてて—、京都教育大学紀要、査読無、119巻、2011、33-48
- ⑫ 平山朋子、松下佳代、理学療法教育における自生的FD実践の検討—OSCEリフレクション法を契機として—、京都大学高等教育研究、査読有、15巻、2009、14-18、[http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/index\\_publication.html](http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/index_publication.html)
- ⑬ 伊藤実歩子、オーストリアの教育スタンダード導入に関する一考察、教育目標・評価学会紀要、査読有、19巻、2009、27-36
- ⑭ 石井英真、アメリカの思考教授研究における情意目標論の展開—「性向」概念に焦点を当てて—、教育方法学研究、査読有、34巻、2009、25-36
- ⑮ 石井英真、アメリカにおける教育目標論の展開—パフォーマンス評価論による行動目標論の問い直し—、カリキュラム研究、査読有、18巻、2009、59-71
- ⑯ 松下良平、リキッド・モダンな消費社会における教育の迷走、現代思想、査読無、37巻4号、2009、114-142

[学会発表](計29件)

- ① 松下佳代、Beyond the rubric: Grasping the quality horizontally as well as vertically in performance assessment、The World Association of Lesson Studies International Conference 2011 (Symposium)、2011年11月27日、東京大学(東京都)
- ② 遠藤貴広、Reconstruction of Teacher Education as Cultivating Professional Learning Communities: A Case of the Undergraduate Curriculum of Teacher Preparation Program at University of Fukui、The World Association of Lesson Studies International Conference 2011

- (Poster Session)、2011年11月27日、東京大学(東京都)
- ③ 樋口太郎、福祉国家論における教育の位置—G. エスピン=アンデルセンの所論に焦点をあてて—、教育目標・評価学会第22回大会、2011年11月20日、奈良教育大学(奈良県)
- ④ 松下佳代、平山朋子、Student assessment and learning of clinical competence: Development of OSCE-R and its revision、ISSOTL (International Society for the Scholarship of Teaching and Learning) 11、2011年10月21日、ミルウォーキー(アメリカ)
- ⑤ 松下佳代、全国学力・学習状況調査とPISAの同型性—JELSの経験をふまえて—、第47回日本教育方法学会、2011年10月1日、秋田大学(秋田県)
- ⑥ 松下佳代、平山朋子、Is simulated practice effective in the transition from school to work?: The case of OSCE-R for physical therapy education、ISCAR (International Society for Cultural and Activity Research) 2011、2011年9月7日、ローマ(イタリア)
- ⑦ 遠藤貴広、州テスト政策に対抗する「草の根の」教育評価改革—New York Performance Standards Consortiumの取り組みを事例に—、日本教育学会第70回大会(ラウンドテーブル「米国における「草の根の」教育改革の現状と課題〜トップダウン型教育改革との対比を中心として〜」)、2011年8月24日、千葉大学(千葉県)
- ⑧ 遠藤貴広、NCLB法制定後の米国エッセンシャル・スクール連盟におけるパフォーマンス評価を組み込んだアカウンタビリティ・システムの展開—ニューヨーク・パフォーマンス・スタンダード・コンソーシアムを事例に—、日本カリキュラム学会第22回大会、2011年7月16日、北海道大学(北海道)
- ⑨ 松下佳代、大学における学習の質の評価—パフォーマンス評価を中心に—、教育目標・評価学会第21回大会、2010年12月12日、前橋国際大学(群馬県)
- ⑩ 松下佳代、平山朋子、An investigation into voluntary faculty development practice in physical therapy education: With OSCE-Reflection Method as a turning point、International Society for the Scholarship of Teaching and Learning Conference 2010、2010年10月20日、リヴァプール(イギリス)
- ⑪ 松下佳代、問題提起:〈新しい能力〉とは何か—2つのコンピテンシーを中心

- に—、日本教育学会第69回大会、2010年8月22日、広島大学(広島県)
- ⑫ 樋口太郎、能力を語ること—その歴史的・現代的形態—、日本教育学会第69回大会、2010年8月22日、広島大学(広島県)
- ⑬ 樋口とみ子、リテラシー概念の展開—機能的リテラシーと批判的リテラシー—、日本教育学会第69回大会、2010年8月22日、広島大学(広島県)
- ⑭ 石井英真、学力論議の現在—ポスト近代社会における学力の論じ方—、日本教育学会第69回大会、2010年8月22日、広島大学(広島県)
- ⑮ 杉原真晃、大学教養教育におけるコンピテンシーの批判的検討、日本教育方法学会、2009年9月26日、香川大学(香川県)
- ⑯ 石井英真、NCLB法を問い直す視座—スタンダードに基づく教育改革のローカルな展開に着目して—、日本教育学会、2009年8月29日、東京大学(東京都)
- ⑰ 松下佳代、「汎用的(generic)」という神話、日本カリキュラム学会、2009年7月11日、神田外語大学(千葉県)
- ⑱ 松下佳代、大学における目標・評価の標準化の批判的検討—Tuning Projectを事例として—、教育目標・評価学会、2009年6月20日、東洋大学(東京都)

〔図書〕(計27件)

- ① 石井英真、ぎょうせい、「パフォーマンス評価をどう実践するか」(田中耕治編『パフォーマンス評価』)、2011、18-37
- ② 松下良平、愛知教育大学出版会、「学力と教養をめぐる教育学のジレンマ—教養としての教育へ—」(日本教育学会中部地区研究プロジェクト(編集代表・豊田ひさき)『教養と学力』)、2011、63-85
- ③ 松下佳代、樋口太郎、樋口とみ子、杉原真晃、石井英真、伊藤実歩子、本所恵、ペンティ・ハッカライネン、ミネルヴァ書房、〈新しい能力〉は教育を変えるか—学力・リテラシー・コンピテンシー—、2010、319
- ④ 松下佳代、日本標準、コンピテンシーを中心とする能力概念の検討(教育目標・評価学会編『「評価の時代」を読み解く—教育目標・評価研究の課題と展望—(下巻)』)、2010、32-41
- ⑤ 松下佳代、東信堂、新しい評価のパラダイム—パフォーマンス評価の観点から—(河合塾編『初年次教育でなぜ学生が成長するのか—全国大学調査からみえてきたこと—』)、2010、205~228
- ⑥ 石井英真、日本標準、算数—パフォーマンス

ンス評価を生かして「活用する力」を育てる―(田中耕治編『小学校 新指導要録改訂のポイント』、2010、38-43

- ⑦ 松下佳代、大修館書店、学びの評価(佐伯胖監修・渡部信一編『「学び」の認知科学事典』、2010、442-458

[産業財産権]

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

[その他]

ホームページ情報

・平成21年度～平成23年度 文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(B)(課題番号:21330179, 研究代表者:松下佳代) 研究成果報告書『ポスト近代社会における<新しい能力>概念とその形成・評価に関する研究』2012年3月31日(全189頁)

(<http://hdl.handle.net/2433/155948>)

報道関連情報

・「<新しい能力>の背景と理論を解きほぐす」『教育学術新聞』2424号、2010年12月1日  
・「「国際学習到達度調査(PISA)」の意味するもの」NHK教育「視点・論点」2010年12月20日

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

松下 佳代 (MATSUSHITA KAYO)  
京都大学・高等教育研究開発推進センター・教授  
研究者番号: 30222300

### (2) 研究分担者

石井 英真 (ISHII TERUMASA)  
神戸松蔭女子学院大学・人間科学部・講師  
研究者番号: 10452327  
伊藤 実歩子 (ITO MIHOKO)  
甲南女子大学・人間科学部・准教授  
研究者番号: 30411846  
遠藤 貴広 (ENDO TAKAHIRO)  
福井大学・教育地域科学部・准教授  
研究者番号: 70511541  
杉原 真晃 (SUGIHARA MASAOKI)  
山形大学・基盤教育院・准教授  
研究者番号: 30379028  
樋口 太郎 (HIGUCHI TARO)  
大阪経済大学・経済学部・准教授  
研究者番号: 30413397  
樋口 とみ子 (HIGUCHI TOMIKO)  
京都教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号: 80402981  
松下 良平 (MATSUSHITA RYOHEI)  
金沢大学・人間社会研究域学校教育系・教

授

研究者番号: 50209540

### (3) 研究協力者

本所 恵 (HONJO MEGUMI)  
日本学術振興会・特別研究員